



増田 敏也

Low pixel CG 「記憶の入れ物 2」

2020、陶、H15.5 × W40 × D32 cm、H6.1 × W15.7 × D12.5 inches

増田 敏也：記憶すくい

2020年8月21日（金） - 9月26日（土）

現代美術 艸居

京都市東山区古門前通大和大路東入ル元町 381-2

開廊時間：10:00AM-6:00PM 定休日：日・月



プレスリリース

この度、現代美術 艸居では増田敏也個展「記憶すくい」を開催致します。テレビゲームのドット絵が立体として立ち現れたような造形の作品で知られる増田敏也。デジタル陶芸家とも呼ばれ、そのポップな作風が SNS 等を通して国内外、様々な層からの注目を集めています。

艸居では初の個展となり、18 点の作品を展示いたします。

学生時代には金属工芸を専攻していた増田でしたが、土を扱うようになったことでその物質としての恒久性や、長い歴史の中で各時代の生活や文化等を表し、造形性にも優れた陶芸というものの魅力を知ることになりました。

増田の作品は、二次元的なイメージを実在感のある陶芸で三次元的に表現したものです。作品は全て地道な手作業で作られており、タタラにした陶土から切り出された細かなパーツを積み重ね削る、あるいは手びねりで全体を形作ってから削り出していく、という手法が取られます。言わばデジタルをアナログで表現するというギャップ、その仮想と現実を行き来するような感覚が見る者を惹きつけます。

そんな自身の作品におけるギャップについて、「最近では相反するイメージを持ちつつも共通する部分も多いのではと考えるように」なったと増田は言います。やきものは縄文土器のように長い時間残るものでありながら、衝撃によって破損してしまう脆い側面も持ち合わせた表現媒体です。同様に、デジタルもデータをクラウド上に保存できるものの決して半永久的とは言えず、サーバーの障害や思いがけぬ理由で消失してしまう脆弱さも併せ持っています。

「デジタルと陶芸、そして自分が生きている時代性や思考の断片を作品に表現することで、この時代だからこそ生まれたやきものの表現として過去に類の無い」独自の世界を築き上げようとする増田の作品の数々を、この機会にぜひご高覧ください。

増田 敏也（ますだ としや）

1977 年大阪府生まれ。1999 年大阪芸術大学芸術学部工芸学科金属工芸コース卒業。テレビゲーム上のドット絵のような陶の立体作品が、めざましテレビや週刊文春などのメディアでも取り上げられ注目を集める。主な受賞歴に 1999 年芸大生のわざ・ワザ展最優秀賞（'00 優秀賞）、2001 年第 7 回素形材センターものづくりコンテスト奨励賞（'02 佳作）、2003 年第 26 回長三賞陶芸展前衛部門長三賞、2005 年第 7 回国際陶磁器展美濃陶芸部門審査員特別賞がある。主なコレクションはヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（ロンドン）、アナドル大学美術館（トルコ）、兵庫陶芸美術館（兵庫）、増上寺（東京）など。



展示作品紹介：



Low pixel CG 「記憶の入れ物 2」、2020、 陶、H15.5 × W40 × D32 cm

陶芸作品は長い時間残る表現媒体であり、生み出されたものは作者の痕跡である。カメラは瞬間を記録する表現媒体であり、写真は撮影者の視線の痕跡である。カメラという器は人々の記憶の入れ物であるという作品。



Low pixel CG「声の距離」、 2020、陶、H35.5×W51×D47 cm

携帯電話の普及によって電話の存在は年々変化し、徐々に街中から公衆電話を見かけることが少なくなった。というよりほとんど見かけなくなった。今やスマートフォンの普及により、アプリの通話機能で通話料金も掛からず何時間でも直接本人と通話できるようになった。世代によってはお金を払って電話するということが自体が未経験なことになっている。実家など話したい相手に直接繋がらないかもという緊張感と、10 円で短い時間しか通

話出来なかったことなどを知る世代もこれからどんどん減少し、いつかは公衆電話のように見かけなくなる日もそう遠くは無い。



Low pixel CG「作用反作用」、2020 、H26 × W10 × D3 cm

ペンチで引っこ抜くことや、ハンマーで打ち込むという行為にはその方向へ力がかかる。(ペンチは引く方向、ハンマーは押す方向) 同時に、引っこ抜かれるものには「引っこ抜かれまい」とする力が、打ち込まれるものには「打ち込まれるものか」という反発する方向にも力が多かれ少なかれ発生している。例えば物がその状況で止まっているということは、二つの力が均等化している状況と言えるのではないか。そういった見えない力の関係を表現した作品。



Low pixel CG 「常識破り」、2020、陶

①：H20×W24.5×D9.5 cm

②：H17×W24.5×D9.5 cm

増田は知識や文明などのメタファーとして「本」というモチーフを利用する。良い面でも悪い面でも従来の常識や価値観などを破壊するようなことや覆すような物事を目にしたり耳にしたりすると、そういう風に時代が変わっているのか、人の感覚が変わっているのか、そういう疑問や思考を具現化した。



Low pixel CG 「夏休み」、2020、陶

大：H5.5×W11×D26 cm

小：H5.5×W9.5×D19 cm

増田の父親が体調を崩したことで親の年齢を改めて考えた。その時ふと、幼き頃泳ぎに連れて行ってもらった情景が脳裏に浮かんだ。親子のビーチサンダルという、ある夏の記憶を想起させる作品である。

是非、貴誌・貴社にてご紹介いただけますと幸甚に存じます。

掲載用、写真の貸出などご質問がございましたら下記までご連絡頂けると幸いです。

プレス担当：元林久美子

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東入ル元町 381-2

motobayashi@gallery-sokyo.jp

Tel: 075-746-4456

Fax: 075-746-4457

www.gallery-sokyo.jp